

定本 宮澤賢治語彙辞典

揺るぎない言葉。ひと粒ひと粒の宇宙——。

賢治の魅力を再発見する一冊！

宮澤賢治賞受賞の定評ある旧語彙辞典をもとに、新たな研究成果を含む大幅な増補改訂を施した決定版。四半世紀におよぶ語彙探索の集大成。賢治ファン待望の一冊！ ISBN 978-4-480-82367-9 四六判上製/貼函入/1104頁 定価12,600円(税込)



本文 組見本

【かしおべあ】

ねずみ(一)、「館」(童山男の四月)、「水館」(簡118)等がある。ほか、童「いてふの実」(ひかりの素足)、短「柳沢」、簡119・120等。

カシオベア【天】 Cassiopeia(カシオベア座) 賢治は

語尾をピア、ピイア、ピーア、ペア、ペイア、ペーアともさまざまに書き分けている。

秋を中心に北天に輝く星座。二等星三、三等星二の計五星がみごとなM(またはW)字形を作る。北極星を探す目印としても有名。秋の天の川中にあり、「テイコの星」(戸直威の「星」(二)では「タイコ星」)や「カシオベア座A」といった超新星が発生したこともあり、また散開星団や散光星団が非常に多い。童「よだかの星」では、よだかはカシオベア座のすぐ隣で星となるが、これはテイコの星を念頭においたものであろう(↓口絵⑩)。カシオベアは古代エチオピア王ケフェウス(隣の星座)の妃であり、アンドロメダの母である。日本では航海上の重要星座として「いかり星」(錨星)と呼ぶ地方も多い。童「水仙月の四日」では「雪童子はまっ青なそらを見あげて見えない星に」むかって「カシオベア」もう水仙が咲き出すぞ／おまへのガラスの水車／きつきとまはせ」とあるが、これはカシオベア座が、ほぼ北極星を中心として一日一回転し、しかも天の川中にあることから水車とみなしたものだ。これに関連したものととして童「シクナルとシクナレス」に、波の音を「夢の水車の軋りのやうな音」として、それを「ピタゴラス派の天球運行の諧言」と述べる一節がある。詩「温く含んだ南の風が」には「北の十字のまはりから」(三)星の座のあたり／天はまるまるといぢめん／青じろい泡瘡にでもかかったやう」とある。「三目星」と表記したのは、童「ポラン



カシオベア座

の広場にある「あの大きな星の三つならんだカシオベア」と同意で、α、β、γの三つの二等星を指したもの。小沢俊郎が指摘するように、下書稿に登場する「マケイシユバラ」(Makheystara) 大自在天。世界の主宰神。特にシヴァ神を指すが三目(三つの目をもつ)であるところから来たものであろう。この部分は最初は「摩訶大魚」で、賢治の手が入るたびに「カシオベア天主三目」↓「三目天主の」↓「三目星」と変化している。下書稿も含めたこの詩「温く含んだ南の風が」全体に登場する星座は、上記のほかに、琴(↓琴座)、赤眼の蠍(↓さそり座)、ヘルクレス、麒麟、射手、白鳥(↓白鳥座)、北の十字、南斗があり、晩夏の北天星座が勢ぞろいしている。

かじか【動】河鹿と書けばカジカガエル(河鹿蛙)のこと。鯀と書けば川魚のこと。賢治の連句中、付句の「古びし池に河鹿なきつ、は谷川や池に生息して美声を出して鳴く雄の河鹿で、童「風の又三郎」に「耕助は小指ぐらゐの茶いろなかじかが」とあるのは鯀。ハゼに似た体長一五cmほどの淡水魚で清澄な川の上流に生息し、美味。地方によってはマゴリ、ゴリとも呼ばれる。帳「兄妹像」五五・五六頁のメモ「カチカ突キ」とあるのも後者で、モリで突いて獲る意であらう。



カシカ

河鹿【名】 ↓かじか
花軸【名】「植」花序の中心となる茎。花が穂状につくとき、穂の中軸となり、花柄をつける枝。詩「オホーツク挽歌」に「萱草の青い花軸が半分砂に埋もれ」とあるほか、多くの詩に出てくる。

本辞典の特色

- * 新校本全集や文庫版全集に対応した豊富な語彙。
- * 賢治の全作品を中心に、ノート・メモ・手帳・書簡も対象。
- * 天文・地質や宗教などの専門用語から賢治の造語まで幅広く網羅。
- * カラー口絵や本文の参考図版のほか、凡例付表や難読項目索引を充実。
- * 賢治の生涯を知る手がかりとなる年譜・関連地図を巻末に付録。

※ご注文・お問合せは、お近くの書店様、または下記・小社営業局まで

筑摩書房

〒111-8755 東京都台東区蔵前2-5-3
電話03(5687)2680 FAX03(5687)2685

●申込書店

●定本 宮澤賢治語彙辞典 978-4-480-82367-0 定価(本体12,000+税) ●冊数 冊

●お名前

●ご住所

●お電話番号